

特集 試される宗教リテラシー

神学的実践と宗教リテラシーの間を 感受する試み

— 輪講「諸宗教における自然と人間」を通して —

原 敬子¹

宗教リテラシーとは誰を対象とした営為なのか。宗教リテラシーが宗教を得体の知れないものと不安に感じる人びとへ知的理解を促すためだけに存在するのではなく、既存の宗教に所属している人びとの実践でもあることを論じていく。

¹ はらけいこ：上智大学神学部教授

はじめに

「わたしはカトリックのシスター、宗教者です」と自らを名乗って行う「キリスト教人間学」という授業を15年ほど担当している。最初の授業でこのように自己紹介すると学生たちは必ずわたしを奇異な目で見ると。この授業はいわゆるキリスト教系大学の必須科目で、登録者の多くは初年度の学生たちである。自己紹介にいく前の学期初めの注意事項までは下を向いていた人たちが、「宗教者です」と言うと、ふと顔をあげる。その眼差しを浴び、「ああ、今年も始まったな」と襟を正す。15年間、毎年、「宗教者と名乗る」存在を初めて目にする学生たちの表情を受入れ、1クール14回の出会いを通し、「わたしという奇妙な存在」を紹介して、彼らが宗教と交わる姿を見つめて来たのだと感慨深く思う。

人前で「宗教者」であると名乗り、「宗教としてのキリスト教」を語る準備に15年、語り始めて15年、全体としては30年の月日を、このような働きに費やした今、これらすべての行為はいったい何だったのかと思い返すと正直なところ複雑な気持ちになる。何も創作していない。出来上がったものを自分の手に取ることもできない。何かの名誉が付与されたのでもない。はからずもキリスト教系の大学に雇用され、大学の精神的基軸であるキリスト教をユニバーシティ・アイデンティティとして学生に伝えるというミッションを押し、わたしとしては忠実に果たしているつもりであるが、そうでなければ一介のキリスト教信者、それ以上でもそれ以下でもない。しかし、この複雑な気持ちのもっと奥に入ると内省してみると、昨今話題の「宗教リテラシー」という語に、どこか響き合うものがあることに気がついた。宗教リテラシー、日本のメディアにおいては、2022年の旧統一教会を巡る事件から突如として耳目を浴びるようになった概念である。

わたし自身、第一義的にはキリスト教信者であり、主体的にわたしの信仰するキリスト教を語っている¹⁾。もちろん授業は公共の場であり、学生を既存の宗教に勧誘すべきではない。しかし、いくら中立な立場でキリスト教を伝えようとしても、わたし自身が宗教者である限り、宗教

／非宗教の深い淵を越えて、あちら側に行くことはできないのである。学生は非宗教者の立場を最後まで保持し、わたしは宗教者の立場を保持する。そこで気づいたのが、公共圏における宗教を検討しようとする宗教リテラシーの存在であった。この両者の深い淵をかろうじて渡らせようとする細く、脆い、小さな橋、それがまさしく宗教リテラシーなのではないか。そして、それは、わたしが15年かけて学生たちと出会い、議論を交換し合って、やっと掴みかけてきたもの、人を涵養していくエネルギーのようなもの、養分のようなもの、あるいは、包み込むやわらかな光のようなもの、それが、宗教リテラシーなのではないか——。こんなふうに考えるようになった。

宗教リテラシーは宗教学においてかなり多くの研究がすでにある²⁾。わたしは一介の宗教者でしかなく、宗教学は門外漢であり、あくまでも神学者という立場から宗教リテラシーを考察しようと思う。それがわたしの研究態度の限界であり、そのような立場から社会に貢献したいと心から願うものである。

したがって、本稿において、筆者は「わたし」という主語を用い、まず、わたし自身が公共圏とキリスト教の関係をどのように理解しようとしているか(1)を述べ、次に、公共圏に存在する諸宗教に、この「わたし」が[・]出[・]会[・]う[・]こ[・]と[・]で[・]成[・]立[・]す[・]よ[・]う[・]な[・]授[・]業[・]の[・]事[・]例[・](2)と、そこに招かれた学生たちが何を感じたのか(3)を紹介し、最終的に、宗教／非宗教の淵は、実は、[・]宗[・]教[・]者[・]の[・]宗[・]教[・]性[・]／[・]非[・]宗[・]教[・]者[・]の[・]宗[・]教[・]性[・]という、多様で豊かな複数の宗教性の感受の場であり、宗教者にとっては神学的実践、非宗教者には宗教リテラシーを実践することである(4)と論じていきたい。

1. シノダリティ——公共圏と信仰

公共圏の理解に関して、ここでは、ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』を参考にしたい。ハーバーマスによれば、公共性の社会的構造には従来、基本的構図が存在していたが、現代、この構造は消滅し、市民的公共性が崩壊したとされる。

市民的公共性は、公権力の領域としての国家（以前の宮廷、王）とは完全に区別され、支配側には存在できない私人の領域、私的（民間）領域、小家族単位の親密な生活圏に存在する。ハーバーマスの指摘は、公共性の社会的構造は、ここでいう私人（私的）領域から公共へと向かう私的な関心という土台が基本となっており、この基本が衰弱した場合には公共性そのものが成り立ち得ないというところにある。

公共的論議の自己理解の特色は、小家族の親密な生活圏において公衆に関心をもつ主体性から由来する私的経験にみちびかれていることにある。この小家族の親密圏は、私的存在の——みち足りた自由な内面性という近代的意味における私的存在の——歴史的水源地である³⁾。

この主体性が「文芸的公共性」（近代におけるカフェやサロン）としての自由な討議空間を経て政治的公共性に参与するという市民的公共性がかつて存在していた。しかし、19世紀以降の「新重商主義」の政治、国家の干渉政策の加速化に際し、「社会の国有化が進むとともに、国家の社会化が貫徹するという弁証法こそが、市民的公共性の土台を（国家と社会の分離を）次第に取りくずし」⁴⁾、市場経済とメディアの興隆により、文芸的公共性は「文化を論議する公衆から文化を消費する公衆にいたる途上で」⁵⁾ その固有性を喪失した。私人の領域の生活圏において歴史的水源地である公共性はかつての王権時代とは別な意味でもはや存在しないという理解である。

宗教学の興隆、そして貢献は、こういった19世紀以降の——宗教に代表されるような——私人の内面性と公共性の融合した水脈、その破壊に対して唯一異議を唱え、踏ん張って来たその証なのであろう。「わたし」のような宗教者と自らを名乗る者たちは、実に、多くの宗教学者の弛みなき営為の途上で、その存在意義を認めてもらい、生かされてきたといえる。

そこで、公共圏に宗教的意義を接続させる多くの試みの中でも「他者

論」「異人」という概念を用い、アプローチする二つの論考をみていきたい。

一つは、磯前順一の「公共圏なき公共宗教論」⁶⁾である。磯前は、「宗教の他者論的転回」として、次のように宗教と公共性の問題を説明する。磯前は「結局のところ、『宗教』とは、その指し示すところのものをどのような名前で呼ぼうとも、謎めいた他者と主体との交渉の過程であり、その共約性のもとに共約不能な複数の主体が一つの公共空間を作る術にほかならない」⁷⁾と述べ、脆弱な主体は、放っておけば容易に均質化の方向へと向かおうとする傾きがあるが、これに対して、宗教こそが他者となり、他者へと開かれる鍵を握る、このような「余白を挿入する行為」こそが、宗教の役割であると述べている。つまり、決定的な他者論として、宗教を理解しようというのである。

もう一つは、中川明の『妖怪の棲む教会』における「異人」論である。中川は、自身がカトリック教会の司祭として長年、宣教論を唱えており、教会における異人性についての論考を発表している。「私」を取り巻く「日常生活の現実」には、自分の「意識」が及び、さらには「我々」という親密な他者による共同体の存在がある。しかし、「我々」とは呼べない「彼ら」が、自分たちの日常に侵入してくる場合がある。その時、「我々と違う」と感じ、それを「異人」と名づける。

中川は、神と出会うためには「頑固な現実」と出会う必要があり、この「頑固な現実」こそが「異人」であるという。

「私たち」の一員である「私」は「彼ら」の全員と出会うわけではありません。「私たち」が接するのは、「彼ら」の中のごく一部です。そういう意味で、「私たち」にとり異人とは、「彼ら」全員ではなく、「私たち」と出会う「彼ら」の内的一部分なのです。異人ですから、「私たち」とは違うという印象を与えるし、不愉快な感情をもたらすでしょう。しかし、同時に、「私たち」と出会っているのですから、「私たち」全員と「彼ら」とを結びつける紐帯ともなり得るのです。「キョウカイ（境界）の上に教会を建てる」なら、境界領域に住

む「異人」が必要です⁸⁾。

中川は、この「異人」こそ、司祭の役割であると述べ、宗教者の独自の存在意義を主張している。異人は、境界領域に住む。ここでの「キョウカイ」は音としての「教会」と「境界」をかけている。

ここで中川は、公共圏なきところに宗教の意義を持ち込み、人間の内面性を引き受け／引き出すような新たな公共性を生み出すために、宗教者が一役を担う可能性を探っているのだと思う。宗教者側からすれば宣教の可能性、一方で、非宗教者の一般市民からすれば、逆に、大きなお世話ということになる。しかし、ハーバーマスのいうところの「歴史的水源地の回復の契機」にもなる可能性を秘めている。

ハーバーマスのいう公共圏の崩壊を何とか打開するために宗教学や教会司牧からの接近を試みるには、余白の挿入や、時に立ち現れる境界という閾、空間におけるコミュニケーション、討議の場の確保というものが前提となる。この世と宗教（キリスト教的文脈であれば「教会」）が二項対立的な位相にあり、その両者は混じり合えないと断念するのではなく、第三の閾を措定しなければならない。ハーバーマスは「自由に漂っているさまざまな価値、主題、論稿、論拠が入りこめるものであり続ける場合に、さまざまな団体によって組織される意見形成が責任ある決定につながれば、それは協力し合って真理を探究するという目標を達成できる」としている⁹⁾。第三の閾においては、討議の可能性が開かれるのである。

現在、カトリック教会において全世界的に展開されている「シノドス Synodos」¹⁰⁾という動きは、第二バチカン公会議終了後より、50年以上、繰り返してきた教会刷新の一つの試みである。シノドスにおいて採用される方法論は、そこに参与する人びととともに、討議の場と討議項目を創生しようとするものであり、この原動力は、まさに公共圏の崩壊に立ち向かう宗教からの挑戦の一例であるといえよう。

「シノドス」という語を説明するのは大変難しい。おそらく、「カトリック教会」という言葉を説明する場合にも、百人いれば百通りの説明

がなされるように、司祭や神学者がシノドスという語を説明しようとするれば千差万別な説明がなされるはずである。カトリック教会内に所属していても、よく理解できていない言葉が山ほどある。よく理解できないながらも、その語を用いて何を試みようとしているか探りながら共通の信仰を生きようとしている。

今回の「シノドス、世界代表司教会議」は、「シノドスのシノドス」とも呼ばれ、「シノドス」という集い方自体についての探究に主に時間が費やされている。「ともに、道を歩む」というテーマを深める会議であり、あらゆる事柄について「討議」あるいは「霊における対話」というメソッドにおいて進行される。討議するテーマでさえも討議によって決められる。2021年、地方教会での討議結果が収集され、各国で要約され、それがバチカンにおいて収集され、さらに討議されるというプロセスを経て、3年目を迎えた2023年10月現在、各国からの代表者による会議が開催されている。

2022年10月に発表された「大陸ステージのための作業文書」¹¹⁾において、「誰も排除されないという根源的な包摂への願い」¹²⁾が述べられた。第一期における地方教会の取り組みをふまえた上で、「回心と改革の旅」¹³⁾を、さらに推進していくという決意が強固なものとされた。シノドスのメッセージは単純で、開かれており、各々が自分の場を見つけ、ともに歩み、ともに座ることを学ぶと語られる時、「誰もがこの旅に参加するよう召され、誰一人として排除されることはありません」¹⁴⁾と、ともに歩むのは誰なのか、誰も排除しないのだと繰り返し強調されている。

今回のシノドスでは、終始一貫して「誰も排除しない」と言い続けた結果、現代の宣教の葛藤、あるいは古^{いにしへ}から教会が抱えてきた「内へ／外へ」という根源的な葛藤の観取に至っている。ひと昔前、教会のすべきことは何かと言った時、「司牧か／宣教か」「刈り入れか／種まきか」の両論で頻繁に議論されたことがあった。今でも「内に向かう（司牧）／外に向かう（宣教）」と単純に考える人は少なからずいる。しかし、この「内へ／外へ」という問題は、あたかもそれが異なる行為かのような錯覚に陥ることから葛藤するのであって、「共通の家 (common home)」

におけるケア¹⁵⁾という俯瞰した視点から理解すれば乗り越えられるのである。

カトリック性は、普遍教会と地方教会の間の**相互の内面性 (mutual interiority)** の関係において実現され、その中において、また、そこから「唯一単一のカトリック教会が存在する」(教会憲章、23項) のです¹⁶⁾。

「カトリック性は、普遍教会と地方教会の間の相互の内面性の関係」に実現する。カトリックとは、そもそも普遍性を意味している。したがって、カトリック性は普遍性と考えて良い。しかし、次に、普遍教会とは何かという問いであるが、この普遍教会という概念を理解するためには、おそらく信仰を享受することが必要である。そうでなければ理解できない概念であろう。普遍教会という確固とした建物の教会が君臨しているのではない。まして、バチカン市国に存在するあの聖ペトロ大聖堂を指しているのでもない。そうではなくて、イエス・キリストによって見出された信仰の礎、その周辺に居合わせた初期の弟子たちによって創設された原初の教会から現在に至るまでの歴史を継承し、そして、今、この地球上に散在する信仰者の集合体、つまり、時間と空間の総体を包含する教会という概念のことを普遍教会という。地方教会はその名のとおり、全世界に今、現在存在する具体的な教会のことであり、そこに集う信者のことである。

この「普遍教会と地方教会の間の相互の内面性の関係」が織りなされる場はどこであろうか？ それはとりも直さず、信者として、信仰者として今、存在している「わたし」においてであり、ともに信仰共同体を創っている「わたしたち」においてである。したがって、わたし自身／わたしたち自身は公共圏に開かれた交わりの存在であることを意識し、その地点において、「霊における対話」(神学的実践)を行う。

中川のいう「異人」である「わたし」は、わたしたち／彼らの境界線上に身を置く「わたし」であり、「内へ(わたしたち)」「外へ(彼ら)」の対

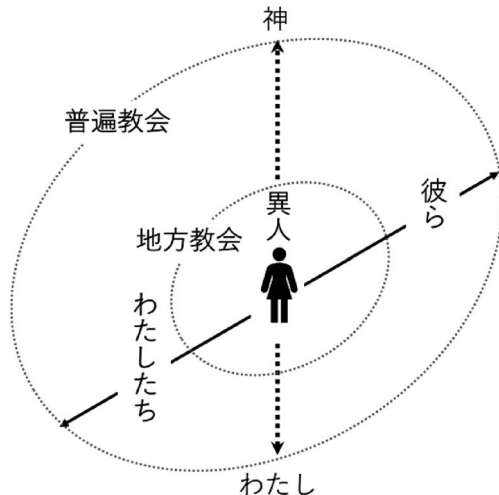


図1

話（横軸）の相互的内面化を行うとともに、宗教者として、自分自身の身を置く具体的な場（地方教会）と、神を志向する超越性のベクトル（縦軸）が形成する普遍教会との境界に立ち、祈りのうちに相互に内面化の作業を行う（図1、著者作成）。この一連のプロセス全体のことを「霊における対話」と言っているのであろう。

もし、普遍教会の在りようが人類の志向する公共圏（もしくは、公共善）にかけ離れていたとしたら、宗教の存在意義が疑わしくなる。したがって、相互の内面性の作業を行うということは、すなわち、異人としての「わたし」に識別の態度が求められるということだ。

2021年から開始されたシノドスは、2023年、2年を経過し、次のフェーズへ移行する上で「霊における対話」の作業に必要な詳細なワークシートを作成した。現代の地方教会における課題は何か、どのようなファシリテーションが求められているか、いかにしてカトリック教会が継続していけるのか。これらの課題についてどのような探究の仕方をすればよいか。こういった方法論の研究が続けられている。このワークシートは、ともに道を歩む（シン・ホドス）ための羅針盤的な役割を担

うような神学的ナビゲーションであり、それを実行する人間がいなければ用をなさない。

2. 輪講「諸宗教における自然と人間」

わたしはキリスト教系大学の中でも、カトリック系大学の神学部に所属し、学部以外の全学生に向け開講されている全学共通科目の中の基盤教育群¹⁷⁾、キリスト教人間学領域の初年度学生必修の科目と、二年次に開講されるキリスト教人間学の展開領域として「祈りの人間学」という授業を担当している。この科目群がいわゆるキリスト教系大学におけるユニバーシティ・アイデンティティの授業ということになるが、それとは別に、全学共通科目としてすでに開講されていた「諸宗教における自然と人間」という輪講科目を2020年より前任者から受け継いでいる。輪講科目で、諸宗教、それぞれの専門家が入れ替わり立ち替わり講義をする趣向である。コーディネーターを受け持つわたし自身にとっては、諸宗教の専門家と対話のできる絶好の機会である。

輪講「諸宗教における自然と人間」の授業概要と目標、授業計画は以下のとおりである。

(a) 授業計画

・ 授業の概要

本講義は、環境教育の一環として、宗教・倫理・哲学の学問分野をふまえ、「自然-生命-人間」のかかわりについて、輪講形式で多角的に学ぶものである。人類の歴史に深く密にかかわる宗教思想（ユダヤ-キリスト教、イスラーム、インド宗教、中国思想、仏教、神道）を学ぶことがベースとなるが、特に、それぞれの宗教の根源にある「人間の自省」という点にアプローチしたいと考えている。諸宗教の根底に流れる霊性の経験に近づくことによって、人間と人間を取り巻く世界との関係性を今も生きるわれわれが、いかにしてその関係の再統合に向かうことができるのかを探究していきたい。

・到達目標

教皇フランシスコの回勅『ラウダト・シ』には、「人間性の刷新なしに、自然とのかかわりを刷新することは不可能です。適切な人間論なしのエコロジーなどありません」(118)と記されている。現代社会における環境・エコロジーに関する諸問題への解決のためにあらゆる面から取り組む必要があり、実践されているが、この授業ではその解決の一つとして「人間性の刷新」という根源的な問いを基軸に置き取り組んでいく。

この授業が到達したいと考える目標は、諸宗教がこれまで取り組んできた「人間性の刷新」をいかにしてわれわれが「自己の刷新」として受容できるかという点にある。「人間論としてのエコロジー」というテーマに深く切り込んでいくことが授業の到達目標であり、受講者にはこの理解が求められる。

・授業計画

- ①コース概観およびオリエンテーション／原敬子(神学科)
- ②ユダヤーキリスト教における自然・生命・人間(1)／久保文彦(基盤教育センター)
- ③ユダヤーキリスト教における自然・生命・人間(2)／久保文彦(基盤教育センター)
- ④イスラームにおける自然・生命・人間／久志本裕子(総合グローバル学科)
- ⑤インド宗教における自然・生命・人間(1)／置田清和(国際教養学科)
- ⑥インド宗教における自然・生命・人間(2)／置田清和(国際教養学科)
- ⑦東洋思想における自然・生命・人間(1)／中田英之(泉州統合クリニック)
- ⑧東洋思想における自然・生命・人間(2)／中田英之(泉州統合クリニック)
- ⑨アクティブ・ラーニング／中田英之(泉州統合クリニック)
- ⑩仏教における自然・生命・人間(1)／寺尾寿芳(実践宗教研究科)
- ⑪仏教における自然・生命・人間(2)／寺尾寿芳(実践宗教研究科)

- ⑫神道における自然・生命・人間(1)／菅浩二(國學院大學神道文化学部)
- ⑬神道における自然・生命・人間(2)／菅浩二(國學院大學神道文化学部)
- ⑭環境と靈性／原敬子(神学科)

すべて100分間一コマの授業のうち、講師におよそ60分～70分の講義をお願いし、残りの30分間を学生からくる質疑への応答時間とした。コーディネーターであるわたし自身、毎回、この授業に参加し、ある時は学生を差し置いて質問が溢れ、担当講師に対して語りかける場面が多かったこともあり、学生からの問いかけをもっと引き出すべきであったと反省するところも多い。いずれにせよ、担当された講師はすべて当該宗教の専門家であり、さらに、専門知識だけではなく、宗教実践者、つまり信仰者であるということも、わたしだけではなく学生にとっても大変刺激的だったのではないかと思う。

(b) 宗教リテラシー

諸宗教を学ぶという時、その方法論としては、各宗教の専門家(場合によっては実践者)が次々に登壇し、個々の宗教について、その教義、靈性、組織(制度)形態等を説明するというかたちで行われ、学習者は相対的に様々な宗教への理解を深めていこうとするのが通常であるし、本授業も基本的にはその線に従っている。しかし、単に、各宗教の特徴の間にある差異を判別し、知識として理解しただけでは宗教リテラシーを身につけたとは言えないであろう。

宗教リテラシーの定義については2006年にアメリカ宗教学会(AAR)によって採用された次のものが参考になる。

宗教リテラシーとは、宗教と社会／政治／文化的生活との基本的な接点を、複数のレンズを通して識別し分析する能力を意味する。具体的には、宗教リテラシーのある人は、1) 特定の社会的、歴史的、

文化的文脈から生まれ、それによって形成され続けている世界のいくつかの宗教的伝統の歴史、中心的テキスト（該当する場合）、信仰、実践、現代的表現についての基本的な理解、そして、2) 政治的、社会的、文化的表現の宗教的側面を、時代や場所を超えて識別し探求する能力を有する（私訳）¹⁸⁾。

宗教リテラシーが求めている能力について以上の考えに基づくならば、図1で考察したところの相互的内面化は、図2のように理解することができるのではないだろうか。まず、宗教と非宗教の境界線を引くのは人間の意識である。したがって、社会／政治／文化的生活が非宗教的であるとするならば、人間の意識の中に、宗教と非宗教の境界が存在することになる。そして、その接点を識別し分析する能力を備えた人間に成長するためには、人間自らが洞察の作業を行わなければならないだろう。したがって、他者へと開かれる余白を挿入する閥、空間はまさしく自分自身ということになり、否応なく「異人」の位置に宗教リテラシーを学ぶ人は立たされることになるのである。

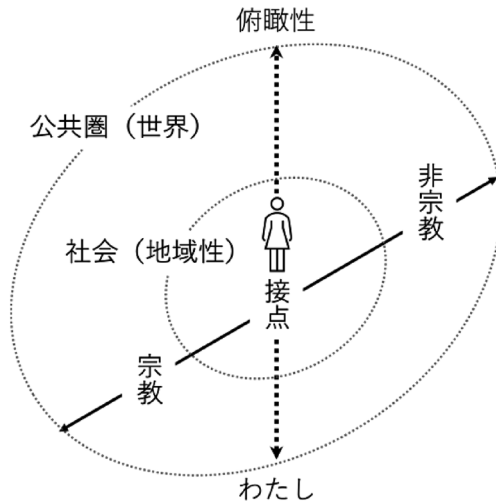



図2

本授業の第一回は、コーディネーターとして授業の概要を話す、近年の宗教事情や、宗教法人法、宗教の一般的知識を述べたあと、「所有と存在の2つの認識」というエクササイズを行なっている。スライドでは以下の2枚となる（筆者作成）。

4.所有と存在の2つの認識

わたしは、
からだを持っている（所有）
からだそのものだ（存在）



エクササイズ：所有と存在のレッスン

今、これまでになく「私は体を持っている」ことを意識する。

どこかよそにいるのではない。体は時間に刻印を押されている。50歳の私が25歳の頃の私と同じ努力を求めても無理だ。体は私の歴史の目に見える痕跡なのだ。

「私は体を持っている」（所有）

次に、今、私は「私は体そのものだ」と感じてみる。この体は私の外部にあり、私が所有している物体などではない。私は私の体を所有できない。しかし、私は単にこの体そのものだということ十分だろうか。健康診断で数値化されるような物理的に、科学的に、生物学的に分析され、記述され得るこの体が私なのだろうか？

「私はこの体そのものだ」（存在）

体は私を、空間と時間の中に位置付けてくれる。いま、ここに、現実に対して私を開かせてくれる。私はここにいる。この場所にいる。

私の体という一つのリアリティに「所有」と「存在」という二つの認識の側面がある。

各宗教の成立や特徴、テキストや歴史に関して通時的に学び、それを理解することは必ずしも困難なことではないだろう。自分は非宗教者だという立ち位置に留まり、顕微鏡を覗くように宗教の専門家や実践者が語る

内容を見ることはできる。しかし、そのような次元で本当に宗教を理解したと言えるのだろうか。宗教を理解するためには、自らの体を観察できるだけでなく（所有の次元）、自らの体そのものとして了解する（存在の次元）ように、宗教の次元に足を踏み込んでいかなければならないのである。

ある意味で、このようなことは今まで一般的には回避されてきたのではないだろうか。洗脳の危険や、勧誘という言葉でタブー視されてきた面が大きい。公立学校で宗教が取り扱われなかったこともあまりにも中立性を重んじた面が強かったのではないだろうか。しかし、宗教の本来的な豊かさ、伝統における知恵を享受し、その働きを認め、世の中に還元しようと思うなら、相互的内面化の作業を軽視することはできない。

3. 学生のレポートからの分析

コーディネーターとして「宗教リテラシー」について、わたし自身、心底研究ができていた状態ではなかったこともあり、授業開始当初は「近年その必要性が唱えられている『宗教リテラシー』の観点からもこの授業を捉えてほしい」とのみ学生に伝えたに留まった。しかし、各回の学生と講師の質疑応答、毎回のリアクションペーパー、そして、最終レポート等を見ると、わたしの想像以上に、学生たちは宗教と社会／政治／文化的な生活との接点を感受しようと試みていたことがわかった。

ここでは、学生の最終レポート（72名提出）から、彼らがどのような意味を本授業に見出したかを図2で検討した位相に照らしながら抽出してみたい。最終レポートの課題は次のとおりである。

メインテーマとして「諸宗教における自然と人間」を置き、各自、これに「サブテーマ」を付け、3000字～4000字で自由レポートを作成する。参考文献は、各授業で講師が挙げたものでも、自分で探したものでも良い。この授業を通じて、あなたが考察し、深めたいテーマを掘り下げてください。

以上、自由な課題を提示した。

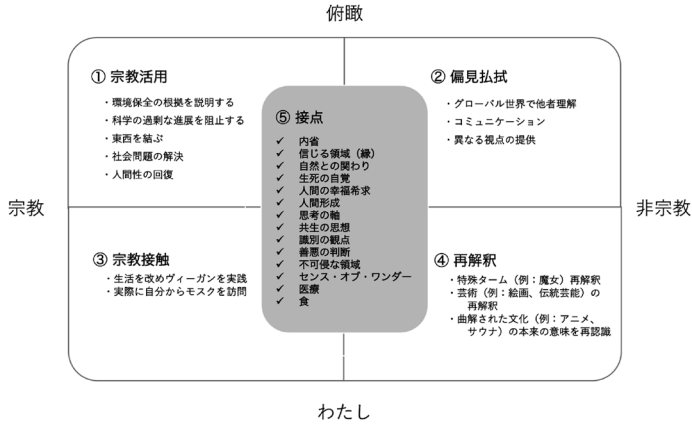


図3

提出されたレポートは、各自の興味があつた授業の宗教について深掘りをするというスタイルが多く、その選択に関しても、キリスト教、イスラーム、ヒンズー教、東洋思想、仏教、神道と偏りなく選ばれていた。筆者の分析は各宗教の特色に左右されずに、彼らのレポート内で本授業の意義、効用等に言及された箇所を抽出しカテゴリーに区分するよう心がけた。

その結果、図2の位相に照らし、図3のように5つの項目に集約した：

- ①宗教を社会のために積極的に活用する意義を見出す (①宗教活用)
- ②諸宗教の授業のような試みで偏見を払拭する (②偏見払拭)
- ③自ら当該宗教に接触、実践を行う (③宗教接触)
- ④社会／政治／文化的生活の再解釈を行う (④再解釈)
- ⑤宗教リテラシー：宗教と社会／政治／文化的生活の基本的接点を見出す (⑤接点)

以下、各項目で記されたいくつかの例をあげておく (文章内の「」書きはレポートからの引用)。

- ①宗教を社会のために積極的に活用する意義 (①宗教活用)

宗教側の人間だと思っているわたし自身にとって、学生の側から宗教

の社会での活用を提案されるのは驚きであった。彼らのレポートの中には衰退傾向にあるキリスト教の宣教に携わる人びとに励ましを与えるような記述がみられる。「宗教を踏まえた自然観を実践に移すことができる状況の構築が必要であり、その普及のためにはより広範な分野との協同が必要」、「科学から見た宗教や宗教から見た科学という視点を持つことで、両者のより良い関係性を構築していくことが可能であり、それが非常に重要な鍵になる」など、宗教者がもっと社会の中で人びとと出会い、対話するように促している。また、「神がない現代の日本では、何かに救いを求めるという受動的な姿勢ではなく、自分が救われるためには何ができるかと能動的に考え行動することが必要」。そのような社会の中で、「キリスト教の精神が日本人にとって馴染みやすいものであるという認識」に至れるような工夫をすべきであるという意見もあった。また、「都市部の自然環境を改善するヒントとして、鎮守の森は認識されるべきである」とし、積極的な活用方法まで提示されていた。

②諸宗教の授業は偏見を払拭する（②偏見払拭）

レポートの中には、以前は宗教を偏見の目で見ていたがそれが払拭されたとの記述もあった。「講義を受ける前は、自分自身が無宗教であったために、『宗教はなんだかよくわからないけど、怖いもの』という偏見が存在していた」、「宗教と聞くと、言い方は悪いがその宗教の思想を押し付ける一面がないわけではないという認識が多少なりとも存在した」というのは、本授業でなくても、キリスト教人間学の授業で何度も聞いたことのあるフレーズである。日本では、1995年のオウム真理教事件以降、宗教という語自体へのタブー視がみられるが、あれから四半世紀経った今もその残骸は消えていない。あの事件を知らない世代である現在の学生さえも、宗教への偏見を持ったままだ。しかし、受講によって「今までの他宗教に対する偏見を改めただけでなく、異なる宗教の人たちがどのように生き、どのように世界と向き合っているのかを理解し」、また、「宗教に対して正しい知識がなく、偏見を持っていると良い関係を築くことは不可能である」という認識を示した学生がいた。

③自ら当該宗教に接触、実践を行う(③宗教接触)

本授業では都内にある宗教施設を訪問することを推奨することにはなかった。もちろん、各授業の講師が都内にはこのような施設があるということを紹介する場面はいくつかあった。しかし、あえて見学会や、イベントを主催することもしなかった。この一例は昨年のことではないが、以前、東洋思想の中田英之氏が修験道の講義を行い、興味のある人は七日間の修行も紹介できるとアナウンスをされたことがあった。その時、一人の学生は実際に中田氏の準備講座を受け、山の中に入るために必要な体力向上に身を投じ、無事、修験道の修行を行うことができた。ちょうど、コロナ禍であったため時間の余裕もあり、本人にとってはとても良い経験になったとのことだった。昨年の授業の中でもやはり実際に、ヒンズー教の置田清和氏の授業に影響され、ヴィーガニズムを試みた学生がいた。「食肉の残酷な面と改めて向き合い今まで以上に菜食に対し肯定的な認識を持つことができています。急に菜食に変えるのは難しいと感じるので、牛乳の代わりに豆乳を飲むなど簡単な部分から挑戦している」。また、自ら代々木のイスラム教のモスク、東京ジャーミイを訪れたという人もいた。

④社会／政治／文化的生活の再解釈を行う(④再解釈)

学生たちを取り巻く社会／政治／文化的生活の中に宗教的象徴や宗教にルーツを遡ることのできる表象などが存在していることに気づいたという記述もいくつか見られた。「グリム童話では自然への恐怖と女性への根本的な恐怖の結びつきがある」、「生贄文化やキリスト教圏で行われていた魔女狩り」にも宗教的な背景があるということを経験から調べた学生がいた。また、別の学生では、趣味でサウナに行くことが多いが、それもフィンランドの宗教と文化的生活との関係から来ていると調べてきた人もいた。諸宗教を学ぶという素養を身につけていれば、目の前の歴史的建造物に対しても見方が変わってくることに気づいた学生は次のように述べている。「建築物に代表される文化物として表象されるものの根本には、その文化の属する宗教の宗教観や信仰の対象への通念が色

濃く表されている。そのため他文化の表層的な受け取りや利用には常に自分の当たり前との齟齬を孕んでいると考えて良い。その一方で、他宗教の文化に触れ、自文化との比較を行うことによって改めて自分の帰属する文化を客観的に見直し、その真理について想いを馳せる体験も必要なものであると考える」。

⑤宗教リテラシー：宗教と社会／政治／文化的生活の基本的接点を見出す（⑤接点）

最後に本題の宗教リテラシーだが、図2の位相中では、宗教と非宗教の境界線に立ち、自ら「識別し分析する能力」の獲得ということになる。この内容についての言及はいくつか見られ、図3の中心に記したように、「内省」「信じる領域（縁）」「自然との関わり」「生死の自覚」「人間の幸福追求」「人間形成」「思考の軸」「共生の思想」「識別の観点」「善悪の判断」「不可侵な領域」「センス・オブ・ワンダー」「医療」「食」と多岐に渡っている。

「科学と宗教はどちらも人々の行動の軸になるものの一つ」、「人々は自らの存在理由を確かめたいと思うもの」と、宗教、非宗教を相対化し、第三の軸である人間とは何かという思索に向かう学生の記述があり、また、この立ち位置が「人間観を磨くことを可能にする」ことを認めた記述もあった。また、「宗教が現代社会で暮らす私たち人類にプラスの影響を及ぼしてくれる存在であることが理解できる。そして、私はこの講義を受講していなければ、触れることがなかったと考えられる価値観に多く触れることができた」と驚きを述べている人もいる。このような境地に至るためには「社会構造や自己のアイデンティティの領域まで関わってくるようなセンシティブなトピック」、「宗教という重たい話題を、それも一つの宗教に偏らず万遍なく触れる」ように、諸宗教に対する真摯な態度が必要であり、授業を開講する側にも自分自身への識別が求められる。

本授業を通して、「『人間の管理し得ない領域』への畏敬の念を思い出すべき」、「宗教と私たち人間や自然を今一度逆側の『悪』の視点から考

える必要」、「自分の帰属する文化を客観的に見直し、その真理について想いを馳せる体験も必要」と、彼らの記述の中に基本的な接点の識別に対する萌芽的記述を見出し、今後の授業構成、宗教リテラシーについてのさらなる考察の可能性を感じている。学生のレポート分析によって彼らが感受している内実に触れ、あらためて本授業の今後の方向性について研究を進めねばならない。

4. 宗教性を感受すること——神学的実践

何を信じ、何を疑うべきか——そのようなことは誰も教えてくれないこの世の中で、学生たちは「諸宗教における自然と人間」の授業を通して、この世に「神を信じて生きる人間」が、少なくとも存在しているのだという事実にも驚いていたようだった。しかも、さまざまな宗教に関与し、自ら実践している複数の人が狂信的に世から逸脱した生活を営んでいるわけではなく、教員であり、医師であり、自分と同じ側に立つ人間であるということを講師の口から聴かされることで、学生たちも新しい経験をしたようであった。講師の側も自らの信仰経験を伝えるために自己中心的な態度ではなく、他者との対話が可能な言語を用い、語っていた。

講師の講義が終われば、コーディネーターのわたしと他の講師とが対話を始める。熱い議論の口火が切られる。ほとんど毎回、わたし自身が、他の宗教における「神と自然と人間の関係性」について生で話が聴けるということに熱くなってしまったのである。宗教者と宗教者の出会いにおいて、宗教性についての対話が始まる。わたしばかりが話してしまうことにならぬよう、できる限り冷静になって、学生からの質疑応答の時間に移るように心がけた。毎回、数人の質問者をあらかじめ選んでおき、必ず対話の時間を設け、双方向的コミュニケーションを実現させた。この対話的な空気感を醸し出すことで、教室にいる全員が講義された宗教に対峙し、同時に、自分自身に向き合う経験の内省が求められていることを実感できたように思う。

ドロテー・ゼレは、組織神学の解説において、神学の有効性は「人間の諸経験の考察」にあると述べている。「神学の対象となり得るのは、神と人間の関係性だけ」であり、神学とは、人間が「『神』という名で呼んだことについて、語らずにはいられないようにさせてしまった諸経験」¹⁹⁾の考察である。西洋の歴史において行われてきた神学、人間を矮小化し神を権力者へとおとしめるような神学、神を思考の対象とし、人間経験を度外視できるような分析的な神学、そのような神学に対する怒りの行動として、ゼレは、聖書にみられるような「聞きながら答える」といったヘブライ的思考に重点を置きながら「神と人間の関係性」を、神学の根本動機として据えるのである。人間経験なしの神の考察はなく、神なしの人間経験の考察もないとする立場である。

自らの宗教を講じる者は、自身の宗教の神学的素養を身につけるための学問を修めたかどうかにかかわらず、ある種、識別能力、いわば、逆のベクトルから見れば、宗教リテラシーが必要なのではないだろうか。わたしはその営為のことを「神学的実践」と呼びたい。現在に至るまで「実践神学」という神学の一領域は存在している。それは宣教論や司牧的カウンセリング、牧会論といったいわば教会内外での活動、つまり実践 (praxis) のためにどのような神学が求められるかという提題で培われてきた学問領域である。しかし、ここでいう「神学的実践」とは、必ずしもそのような教会活動を促進する目的のためのものではない。宗教リテラシーに近い。宗教リテラシーが、宗教と社会の接点を分析、識別する実践であるように、神学的実践は信仰者が社会と宗教の接点を分析、識別する実践を指し、また識別の能力を養うような知的、精神的実践 (エクササイズ) なのである。

信仰を基底とした宗教的諸経験を他者に伝えたい者は、自己中心的な主張に陥ることなく、また、相手を折伏することなく、他者との平等で対話的な関係性を常に構築するために、リテラシーという実践を必要とする。ゼレは、神学の遂行のために「信仰の経験を分かち合う人びとの間の合意が、繰り返し作り出されなければならない」(傍点、引用者)²⁰⁾と述べているが、このことはまさに、宗教を語る側(ここでは信仰の諸

経験をした者)に対して、非宗教の相手(同じ諸経験をしてはいない)との接点を、複数のレンズを通して分析し、識別する努力と能力が求められているということなのであろう。

大学の講義ということもあって各講師はあらゆる資料を駆使し、当日、教室でのパワーポイントも使用しながら、学生たちに紹介する宗教がどのような歴史と教義から成り、また、人間が経験できる実践としてどのように表現されるかを語っていた。結果的に、これらの提示はすべて、社会と宗教の接点について学生たちが複数のレンズによって分析し、識別することができるようになるための材料であったと思う。これらの材料を吸収し、咀嚼しながら、接点の場に存在する学生たちにとってもっとも内面的に必要な作業は、提示された知識を単なる知識として脳裡に留めることではなく、彼らの情緒、感受性、さらに言えば皮膚感覚にも近い受容体の働きによって、内省するということだったのではないだろうか。今後さらに、本授業を宗教リテラシーの授業として展開させていくために、いくつか研究に必要な点を最後に述べていきたい。

「わたし」自身は、あくまでも神学を生業とする研究者として今後も宗教リテラシーについて探究を進めたいと考えている。その場合、神学と宗教との密接かつ批判的な関係性について把握する必要がある。上記と同じくゼレの論考を引用したいが、彼女は保守的な神学者と、進歩的な神学者の両者に向け、宗教を軽視してきた神学者への批判として次のように述べている。

神学者たちは、宗教の問いに耳を傾けることなしに、神学的な答えを与えた。宗教に対するこれらの問い、つまり何か他なるものへの憧れ、別の生き方への願いはほとんど表明されたことがなく、あるいは考えぬかれたことがまったくなかった。それは、人々を夢の中に沈め、彼らの現実から目を逸らすことのできる漠然とした感情である。(中略)そもそもこの宗教的要求の内容は何であろうか。人間は何にあこがれているのか。それは全体であろうとする願い、

切り刻まれてばらばらになっていない生への要求である。宗教的な言葉に属する「救い」という古い言葉は、まさしくこの全体であること、切り刻まれてばらばらになっていないこと、壊れていないことを表現している²¹⁾。

少々引用が長くなってしまったが、神学者としてのゼレが、宗教からかけ離れてしまった神学を宗教と和解させようと試みていることがこの文章から窺える。この和解のために、中心に位置づけられているのが「感情」である。人間の感情、それは、全体であることへの願いである。切り刻まれてばらばらになっていない生を希求する根源的な動力のような働きであり、ゼレはそのことを宗教的要求（宗教性）と述べ、神学においてそのことが語られない、忘れ去られていることを憂いているのである。ゼレは、人間のこの願い、宗教性は、放棄することのできないものだとしている。したがって、宗教／非宗教の淵は、図4のように、【宗教における宗教性】／【非宗教における宗教性】の感受の場となり、

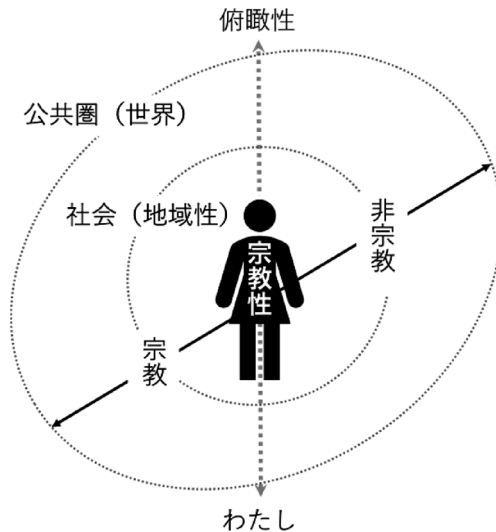


図4

わたしのような宗教者にとっては宗教性の回復を神学的実践とし、非宗教者にとっては宗教リテラシーの実践として、同じ地平で生きられることとなる。

おわりに

2023年10月現在、ローマのバチカンにおいて第16回世界代表司教会議シノドスがまさに行われており、シノドスの教会へと変革するためにカトリック教会の史上初の会議が位階制の垣根を超えて、ラウンド・テーブルでの霊における会話という手法による会議が繰り広げられている。毎朝のプレゼンテーションは即時インターネットによって配信され、分かち合いの内容は守秘義務が敷かれているものの、どのようなテーマで分かち合いがなされているかを知ることが可能となっている。メディアは同性婚の問題や妻帯司祭の今後、女性助祭の可能性等、変革内容への興味関心に集中するが、参加者は淡々と霊における会話(The conversation in the Spirit)によって傾聴を続けているようである。

霊における会話と言われている手法は、自分自身の内面に動いている感情を意識し、沈黙の時間を取り、聖霊の導きに促され、他者との会話に開かれるような語りを行うことにある。また、自分自身がそのように会話に開かれているように、他者にも語りの場を与え、他者の語りをよく聴く、その繰り返しである。このシノダル・メソッドと言われ始めた方法、すなわち、霊的共同識別は、今に始まったものではなく古くから教会の霊性の歴史的水脈に流れており、特に、修道院文化の中で重んじられてきた。

宗教リテラシーの今後の展開にとって、霊における会話の手法は非常に重要な役割を果たすことになると思う。より探究を深めていくべきであり、それが求められていくはずである。イヴリン・アンダーヒルはその著書の中で、神秘主義の実践(Practical Mysticism)は、特権的な人びとの独占物ではなく、普通の人たちの日常生活の中で実践できるものであり、また、それが現代の人びとにとってとても重要な習慣であると

述べている。アンダーヒルは、「神秘主義とは『《^{リアリティ}実在^{アート}》との一致の技』であり、神秘家とは『その技を多かれ少なかれ獲得している、あるいは獲得できると信じ、目指す人』⁽²²⁾」であると定義する。その人間を取り囲む社会、環境との関係性を深め、一致への技術を身につける。社会にコミットメントを促し、新たな公共圏の創出にもつながる。

霊における会話の手法は、西洋における神秘主義の伝統のみならず、東洋の瞑想の中にも開花している。アントニー・デ・メロはイエズス会司祭で、祈りの指導者、霊的指導者として活躍し、多くの書籍を残している。彼は祈りの方法として呼吸を中心に知覚を意識するよう、祈りの参加者に指導する。『東洋の瞑想とキリスト者の祈り』⁽²³⁾の中で紹介されている最初のエクササイズは、ただ10分間の沈黙を守ることである。心と知性の全体に沈黙が行き渡るよう努めることを勧める。そして、静かに目を開き、10分間に自らに起こったことを内省し、グループで分かち合う。霊における対話である。非常に単純なエクササイズではあるが、一人一人の内面に起こっている出来事は一人一人異なるものであり、それを一人一人が意識し、表現し、他者に伝え、また、他者からの話を聴く。同じように過ごす10分間という時の中で自分自身が経験していることは自分にしか分からない。自らの内面に働いている感情、感受性を用いなければ経験を振り返ることはできない。「キリスト者の祈り」と題されているがエクササイズの中にはキリスト教信仰を前提としなくても経験できるようなエクササイズも多くある。このような実践も、キリスト者からすれば、内省を促進する神学的実践となり、そして、非キリスト者だという主張する人に対しても、自分自身の感受性に気づくエクササイズとして宗教リテラシーの実践項目に積極的に導入することができるのではないだろうか。

以上、自分自身の授業に対して、初めて、宗教リテラシーの観点から考察を行った。上記のような神秘主義の実践、祈りのエクササイズに関しては、学生から受容される面と、また、拒否反応を引き起こす面もあるのではないかと思われる。今後、リテラシーの項目をさらに調査し、授業の刷新につなげていきたい。

注

- 1) 同じキリスト教徒だと言ったとしてもどのような信仰かという話になると、それぞれ異なった話になる。「同じ宗教の信仰をもっている人々のあいだでも、その『信仰』はさまざまに表現されます」。石川明人『宗教を「信じる」とはどういうことか』ちくまプリマー新書415、筑摩書房、2022年、p.110。
- 2) Cf. *Religious Literacy in Policy and Practice*, Edited by Adam Dinham and Matthew Francis, Policy Press, 2015.
- 3) ユルゲン・ハーバーマス『〔第二版〕公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』（1990年）細谷貞雄、山田正行訳、未来社、1994年、p.47。
- 4) 同上、p.198。
- 5) 同上、p.231。
- 6) 磯前順一『公共宗教論から謎めいた他者論へ』春秋社、2022年、p.63。
- 7) 同上、p.74。
- 8) 中川明『妖怪の棲む教会——ナイスを越え教会の明日を求めて』夢窓庵、2002年、p.131。
- 9) ハーバーマス、前掲書、1990年新版への序言、p.XXXV。
- 10) シノドスとはまさにシン・ホドス (*sun-+hodós*) 「ともに、道を(歩む)」という語源から派生した造語である。第二バチカン公会議の直後、1965年、教皇パウロ六世は、公会議後の歩みを全教会のシノドスの歩みと位置付け、教皇が提起した問題を協議し意見する機関、会議体として設置した。シノドスと呼ばれる世界代表司教会議には「通常総会」と緊急時の「臨時総会」、また地域別の「特別総会」があり、最近では2008年「聖書」、2012年「宣教」、2015年「家庭」、2018年「若者」をテーマとして通常総会が行われてきた。2015年、教皇フランシスコは現代の教会を「シノドスの教会 (Synodal Church)」と定義し、2021年～2024年にかけて行われている第16回通常総会シノドス、テーマは「ともに歩む教会——交わり、参加、そして宣教」を準備した。つまり、これまではシノドスという語を会議の機関として理解していたのに対し、だんだんとシノドスという語は教会のあり方、教会を特徴づける性質というふうに見えるようになってきた。第一期「教区ステージ」全世界各地の教会において信徒が討議し、意見書を各国ごとに取りまとめる。第二期「大陸ステージ」第一期で上がってきたまとめを大陸別会合にて討議する。2023年10月現在、第三期「司教総会」各国代表の信徒（女性を含む）も加わり総勢約400名で、討議すべき内容について考察する。各ステージにて採用されている方法が「霊における会話」。必ず小グループでのセッション（祈りと分かち合い）が行われ、全体会で共有する方法がとられている。

- 11) シノドス事務局「あなたの天幕に場所を広く取りなさい」(イザヤ 54・2)「大陸ステージのための作業文書」[暫定第2版] バチカン市 2022年10月24日。 https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2022/11/Document-for-the-Continental-Stage-of-the-Synod2022_rev2.pdf
- 12) 同上、11項1)、p.5。
- 13) 同上、99～103項、p.29-30。
- 14) 同上、103項、p.30。
- 15) 『世界代表司教会議 第16回通常総会「討議要綱」—第1会期(2023年10月)』 https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2023/08/synodos_202310.pdf、2023年6月20日。「共通の家」common home は common good (共通善) とともに、討議要綱において何度か語られている。2015年に教皇フランシスコより発布された回勅『ラウダト・シ—ともに暮らす家を大切に』における「common home」、地球を家とみる思想の延長線上にあると考えられる。ここで、教皇は温暖化等の地球環境破壊の現状に対して、地球を一つの共通の家とし、いかにして環境保全に取り組めるかを述べている。
- 16) 同上、12項、p.8-9。
- 17) 上智大学が始めた基盤教育構想は「自ら学び続ける学修者となるための学び」の実現を目指し、数年の準備期間を経て、2022年から本格的に実施されている。基盤教育群の中に七つの領域：キリスト教人間学、身体知、思考と表現、データサイエンス、社会課題と展望、視座、実践・経験があり、学生は各領域の授業を必須科目として取得せねばならない。詳しくは、<https://piloti.sophia.ac.jp/jpn/cle/> 閲覧日 2024年1月11日。
- 18) Diane L. Moore, “Diminishing religious literacy: methodological assumptions and analytical frameworks for promoting the public understanding of religion”, in *Religious Literacy in Policy and Practice*, Edited by Adam Dinham and Matthew Francis, Policy Press, 2015, p. 29.
- 19) D・ゼレ『神を考える——現代神学入門』(1990年)三鼓秋子訳、新教出版社、1996年、p.11。
- 20) 同上、p.14。
- 21) D・ゼレ『内面への旅——宗教的経験について』(1975年)堀光男訳、新教出版社、1983年、pp. 194-195。
- 22) イヴリン・アンダーヒル『実践する神秘主義——普通の人たちに贈る小さな本』(1915年)金子麻里訳、新教出版社、2015年、p.19。
- 23) アントニー・デ・メロ『東洋の瞑想とキリスト者の祈り』(1978年)裏辻洋二訳、女子パウロ会、1980年、p.15。